

Risks of dementia in a general Japanese older population with preserved ratio impaired spirometry: The Hisayama Study

川床, 健司

<https://hdl.handle.net/2324/7182376>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : © 2023 Kenji Kawatoko et al.



氏 名： 川床 健司

論文名： Risks of dementia in a general Japanese older population with preserved ratio impaired spirometry: The Hisayama Study

(日本人地域高齢住民におけるpreserved ratio impaired spirometryと認知症発症との関連：久山町研究)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

背景：preserved ratio impaired spirometry (PRISm) と認知症との関連に関する研究は限られている。実臨床において、PRISmは呼吸機能障害の一つではあるものの、見過ごされることが多い。我々は、日本人高齢者集団におけるPRISmと認知症発症との関連について検討した。

方法：認知症のない65歳以上の日本人地域高齢者住民1,202人を対象に、中央値5.0年の追跡調査を行った。研究参加者は調査開始時点の呼吸機能検査により以下のように分類された：呼吸機能正常群（1秒量/努力性肺活量0.70以上かつ対標準1秒量80%以上）、PRISm群（1秒量/努力性肺活量0.70以上かつ対標準1秒量80%未満）、気流制限（Airflow limitation、以下AFL）Global Initiative for Chronic Obstructive Lung Disease (GOLD) 分類 1群（1秒量/努力性肺活量0.70未満かつ対標準1秒量80%以上）、AFL GOLD分類 2～4群（1秒量/努力性肺活量0.70かつ対標準1秒量80%未満）。ハザード比および95%信頼区間はコックス比例ハザードモデルを用いて算出した。

結果：追跡期間中、122人が認知症を発症した。呼吸機能正常群、PRISm群、AFL GOLD 1群、AFL GOLD 2～4群の研究参加者における認知症の性年齢調整後の発生率（対1,000人年）は、それぞれ20.5、37.0、18.4、28.6であった。PRISm群の認知症の発症リスク（多変量調整後）は、呼吸機能正常群と比べ有意に高かった（ハザード比 2.04；95%信頼区間, 1.19-3.49）。さらに、対標準1秒量および対標準努力性肺活量の低下は、いずれも認知症の発症リスク上昇と関連していた。

結論：日本人地域高齢住民において、PRISmは認知症発症のリスク上昇と関連していた。